

いま、子どもたちは

試される親の本音

百瀬 道子

はじめに

私は卒業以来、二十五年以上、東京郊外の公民館で働いている。主に、大人の学習にかかわっていて、「幼児の教育」については知識も経験もない。それなのに、突然の原稿依頼を簡単にお受けしてしまい、実のところ、今になって戸惑っている。

る次第である。

公民館で、幼い子どもがいる女性の学習のひとつとして、その人たちの生後六カ月から三歳くらいまでの子どもたちを預かる保育室活動を担当している。その活動の主な目的は、核家族で初めての子どもと向き合っている母親たちが、子どもを身内以外の人に預けることで自分と子どもの関係

を見直したりする学習活動で、この雑誌の読者には縁の少ない話だと思う。

そこで、極私的に、自分の子どもについて書いてみようと思う。どなたも知らないのに却って都合がいい。

穏やかな日を取り戻して

二月の早朝、台所に行くと、ほんわかと温かく、ランプの点いたままのオーブンの中に膨らんだチーズケーキが入っていた。前夜「お母さんまだ寝ないの？」と娘が聞くので、何を企んでいるのかといぶかしんでいたが、私の誕生日祝いに、内緒でケーキを焼いてくれたのだった。

思い通りにはならない

娘M子は、今十七歳。金髪に染めた髪を、エクステ（エクステンション||付け毛）で長く伸ば

し、二十センチはありそうなサンダルを履き、フルメイクして出掛けて行く。父親である夫は、外で会っても声を掛けられたくないという。

事の発端は、高校二年、二期期の始業式。秋に行く中国修学旅行のため、パスポートを用意し、夏休み中茶色にしていた髪を黒いスプレーで染めて登校したところ、「黒すぎて不自然」と注意された。初めてのことでなかった。「個性を尊重し、国際感覚を養う……」という教育方針の学校だが、一度服装で烙印を押された子への「指導」は、精神的な虐待に近いものであったようだ。



娘の決断

それからしばらく、娘は自室に閉じこもった。夜中まで携帯電話で友だちと話したりしていた。目つきも暗く、すさんだ感じすらした。ちょうどそのころ十七歳の誕生日を迎えたが、お祝いの食卓を囲む雰囲気ではなく、夫は、メールを送った。

「M子さんへ」

十七歳の誕生日おめでとう。M子もいろいろ大変そうだけど、自分を見失わずに頑張って下さい。お父さんは、怒ることもあるけれど、M子のことが、すごく心配になるからです。M子は、お父さんにとって、とても大事な娘です。家族のことも忘れないでいて下さい。」

面と向かって話すことの少なくなっていた父娘だが、夫のパソコンにすぐ返事が届いた。

「メールありがとう。すごい感動して涙でちゃったよ。もう十七歳なんてホントに早いと思う。しかもこの時期にまた新しい道に進もうとしているよ。学校を辞める事は何の悔いも心残りもないよ。本当に親の望まない事をしてるよね。迷惑や心配もたくさんかけているよね。ごめんさい。でもM子だって何も反抗なんてしたくないんだよ。けど結局あの学校にはもう通えないな。M子は遊ぶために辞めるんじゃないし本当に自分を見失わないで頑張るよ。M子が言える立場じゃないけど応援してほしい。(略) M子は今本当に友達に恵まれているし愛されてるんだよ。(略) 今友達に恵まれているのって親のお陰だよ！改めて本当にありがとう。メールだからこんな素直にいろいろ言えるね。これからまたきつと素直になれなくて喧嘩になることもあると思う。だけどそれは、反抗じゃないんだよ。本当にメールありがとう

う。これからまた金髪にしてもM子は、パパの娘です。」

我が家は、ふたりとも働いていたため、二十歳になった息子もM子も産休明けから保育園に通い、夫も「ママコート」を着て子どもをおぶって送迎したこともあった。大きくなってからも、サッカーや野球の観戦、映画などにも一緒に出かける気の合う父娘だった。

明るい退学

完成したばかりのデラックスな新校舎に移動して、気持ちを切り換えるかと思ったが、外見を非難するばかりで、その他を見ようとしない教師への不信とストレスで、登校時間になると腹痛を訴えるようになり、九月末に退学してしまった。学校からは親に連絡もなく、退学届の用紙を渡されただけだった。私は、文例にあった「一身上の都

合のため退学させていただきます」を無視して「貴校の教育方針が納得できないため退学させます」と記入して郵送した。

赤ちゃんに癒されて

あれから半年。同級生は高校三年生になった。M子は、退学と同時に、近所にできたばかりの小さな保育室（家庭福祉員）でアルバイトをしている。中学校の同級生の家の前にベビーカーがいつも止まっているので、どうしてかと尋ねて、ちょうどそのころ、産休明けの子どもたちを預かる保育室を始めたのを知り、早速押しかけて働き出した。

娘の二歳の誕生日に保育園から贈られたカードに「大きくなったら保母さんになりたい」と書いてある。今、その夢の仕事を得て、まだ小さな五人の赤ちゃんを過ごすことで、随分癒されている

と思う。ベビーカーに乗せて散歩に行くと、知り合いが怪訝そうに見ていたり、“ヤンママ”に間違われることもある、と楽しそうに話してくれる。預けている人の連絡ノートをみて、働く母親の不安や大変さを知ったり、改めて自分自身の保育園時代のノートを見たりしている。

先日、市役所の人が調査に来た時、見慣れない男性にびっくりした子どもたちが、大慌てでM子に抱きついてきたそうだ。夕食の時も子どもたちの様子を話してくれる。

教師に傷つけられた心を、何の先入観もない赤ちゃんたちが癒してくれている。また、金髪で、鼻にピアスをつけている子を、受け止めて働かせてくださった「萌保育室」の先生や、育児経験のないM子を支えてくださっている先輩保育者、励ましてくれる赤ちゃんの親たち……。本当に、親以外の人に支えられて、M子は元気になっていっ

た。

自分のことは自分で決める

高校を辞めると言ったとき、何度も論し、「あと一年、すわっていれば、出られるのだから」とまで言った。でも、子どもだって、自分に必要な事は、自分で選び取っていくのだと、今ならわかる。『子どもの権利条約』を見るまでもなく。

最近、私の仕事「母と子の教室」の参加者の親睦会があった。一歳になったばかりから三歳くらいの子どもを保育室に預けて学習している人たちの会である。私が時々話した“金髪の娘”に会い



たいと言うので、娘を誘うとハデなかつこうで登場した。いつも自分がみている赤ちゃんと同じような子どもがいる人たちと、四時間近く一緒に過ごした。M子は臆することなく、「高校はやめてよかった。やめたから、保育室の仕事に出会えたり、将来保育さんになりたいという夢もはつきりした」と語っていた。その様子を見ていて、あれなら大丈夫、とやっと思えた。

M子は「ぴっち」

子どもたちが、小さいころ、寝る前に、一冊ずつ本を読んだ。私は、子どもたちが、一生懸命選んだ、その日の一冊を毎日記録し、その時々エピソードも記入した思い出のノートを作った。

M子がある時期とても気に入り、繰り返し選んだ本がある。M子が一歳九カ月の時に購入した

『こねこのぴっち』（岩波子どもの本）である。

好奇心旺盛で、外へ出かけて行つては失敗したり怖い目にあつた子猫が、最後は家族や仲間によさしくされて「ぼくは、もう けっして、よそへはいくまい。ここが、いちばん いいところだ」と思うハンス・フィッシャー作、石井桃子訳の古い絵本だ。

M子の三歳上の息子は、この本がこわくて嫌いだった。つい最近、その息子が「M子は「ぴっち」なんだね。だからあの本が好きだったんだね」と言った。妙に感心してしまい、とても懐かしく思い出した。ガレージの段ボールから、十数年ぶりに、その本を探しだして見て、「そうか、M子は「ぴっち」なのか」と改めて納得してしまった。

（国分寺市立本多公民館）